

令和7年度 第1回豊田市博物館運営協議会 会議録

1 日 時 令和7年8月19日（火）午前10時15分～正午

2 開催場所 豊田市役所 南庁舎5階53会議室

3 出席者

〈委員〉 （敬称略・50音順）北村 和宏・釘宮 順子・黒澤 浩・西塔 隆
新美 倫子・布垣 直昭・平野 敬一・深谷 暢樹・若山 敏美（以上9名）
〈事務局〉 村田館長・高橋副館長・井上副主幹・倉林担当長・伊藤担当長

4 会議の経過

館長あいさつ、会長あいさつ、出席委員の報告（9名）を確認し、本会議が成立することを宣言した。議事録署名人として、職務代理者の布垣委員を指名した。傍聴人なし。

5 内容

議題（1）令和6年度利用実績について

- ・資料1、2により、令和6年度の豊田市博物館観覧者数、施設利用者数、事業実績などについて事務局から説明した。

【委員意見】

（委員）

- ・観覧者数17万人というのは、全国の博物館と並んでも良いレベルの実績。目標が10万人、実績が17万人であるが、目標設定をもっと高くしてもよかったのではないかと。
- ・施設として適切なキャパシティ、これ以上増やしてはいけないレベルがあると思う。例えば、10万人目標に対して17万人実績とすると、15万人くらいを毎年目標にして、下回ったときは問題だったとみる。
- ・地域に根差した館であるため、地域の方の利用比率、若い人の利用比率を示し、評価・指標にしてはどうか。

（委員）

- ・年間284日開館、総利用者数28万人ということは、1日当たり1,000人利用していることになるが、実感としてはそれほどいないと感じる。1人が常設展を見て特別展を見て、むかしの家を見てとすると、1人で5つくらいカウントしてしまうのが、総利用者数だと思う。実際の実数はどれくらいか

（事務局）

- ・委員が求める実数は、数えようがない。
- ・多くの博物館では、出入口カウンターを利用者数としている。実数に一番近いのは、観覧者数である17万人だが、この数字は販売・減免を合わせた発券枚数であり、小学生未満の人数はカウントされておらず、それも実数と齟齬がある。

(委員)

- ・何を目標とするかによってカウントの取り方が違うと思う。トヨタ会館は入館無料の施設で、出入口カウンターで人数をカウントしている。同じカウントの取り方で、去年よりも 5 万人減った、3 万人増えたということによって、何が原因か分析する。カウンター人数で 12 万人くらいだと来場者から不満が出るとか、来場者の満足度を維持できる入場者の適正值など、指標に使える。
- ・正確な数字にこだわるよりは、何のためにその数字をとっているかということを大切にするとよいと思う。
- ・海外の人は、わざわざエジプト展に来るよりは、ジョウモン展や和食展のようなものに興味を持つと思う。インバウンドを目標にするかどうかで、今後の来場者数が相当違ってくると思う。

(事務局)

- ・現状、外国人の来館者の割合は決して多い訳ではないが、その中でもアジア系の方が多い。名古屋を拠点にして観光地に行き、戻る途中の時間調整で来館する方も多いと聞く。また、美術館とセットでの来館が多く、建築物として外観だけ見ていく人も多い。

(委員)

- ・豊田市滞在の外国人は現在 22,000 人、昨年だけで 1,600 人増えている。これらの外国人の方々にも PR できるといい。

(委員)

- ・旅行会社などヘッダーの PR などしているのか。

(事務局)

- ・豊田市に滞在する外国人の方も含め、豊田市博物館について十分に情報発信ができていない。今後、積極的に PR していくべきと考える。

(委員)

- ・企画展のたびに常設展も少しずつ展示内容が変わっている。企画展の広報はよく見るが、常設展が変わっていることを一般の人へ PR しているのか。

(事務局)

- ・団体パートナーや企業とのコラボ展示など、大きな展示替えに際しては報道発表を実施し、取材いただいている。今夏開催している、「せんそうのきおく」という展示は、新聞紙上で 2 回取り上げていただいた。小さな展示替え、例えば展示ケースの 1 つを展示替えしましたという程度のものは、当館の SNS で情報発信している。

(委員)

- ・豊田市博物館の特徴が「つくり続ける」ということで、とよはくパートナーの役割が大きいと思う。随時募集しているのか、パートナーの満足度や活動状況を教えて欲しい

(事務局)

- ・団体パートナーは随時募集をしている。昨年度は 1 年間を通じて登録が増え続けた。
- ・個人パートナーは、2 年ごとの更新制。これから次期の個人パートナー募集をしていく。今回は 40 人程度の募集で、全体としては 200 人程度を上限とする。対応する職員の業

務上の負荷を考慮した上限で募集する。

- ・活動に非常に満足されている方もいる一方で、家庭の事情やご自身の病気などで活動が難しく更新をしないという方もいる。各パートナーそれぞれの活動意向もあるので、一緒に話をしながら続けていく。

(委員)

- ・パートナーの背後にいるたくさんの人たちを、どんどん巻き込んで、広げていって、みんなの博物館に育って行ってほしい

(委員)

- ・P31 と P37 の「満足度」の数値が同じだが、間違いか。

(事務局)

- ・確認して報告する。【会議後、統計を再確認し、当日の会議資料が正しいことを確認】

(委員)

- ・資料 2 の 18 ページ、記憶収集について、博物館での収集が 1,015 件で、常設展の観覧者数からみると 120 人に 1 人が書いてくれていると思う。これは多いのか少ないのか。

(事務局)

- ・今回の数字を低く評価していない。他者の記憶を楽しむ、共感するところから、自分の記憶を残す主旨に理解をいただいた上で投稿いただくのは、結構ハードルが高い。

(委員)

- ・「みんなでつくり続ける博物館」というコンセプトの中で、この記憶収集は、将来的に大きなコンテンツになる。現状で基本的に文字として記憶を残しているが、写真と紐づくことで記憶が鮮明に残る。そういった次なる計画はあるか。

(事務局)

- ・テキストだけでも面白いが、映像や画像があったほうがおもしろいと思うし、記憶が鮮明に伝わる。現状でホームページ上では映像・画像込みで投稿可能である。見せ方として画像や映像の活用の可能性を探っていきたい。
- ・単に記憶を投稿してもらうことは難しいと思う。人がいて、人と人との会話のから投稿する内容のイメージが鮮明化し、書いてくれることが多い。

(委員)

- ・先日、地域の地蔵盆でみんなが集まって、集落の昔の話が話題になった。旭は足助森下紙の発祥の地で、和紙でできているお地蔵さんがある。98 歳のおばあさんが、お参りの話から和紙の歴史の話、地域で和紙以外にどんな産業があったのかなど話してくれた。この方が元気なうちにちゃんと聞いて、これらの話を記録しないといけないなと思いつつ、自分に今それをやれるリソースがない。足助地区では、あすけ聞き書き隊が活動しているが、そういった団体を組織するのが難しい。この博物館の記憶収集活動で、話を聞くきっかけのような、人々の頭の中でしか残っていない記憶を何とか集めていくことができないかと感じた。
- ・その方による戦中の話は、地域の小中学生に聞く機会があればいいと思う。雑談的に話ができる環境を作っていくことが必要なのではないか。

(委員)

- ・自分も含め、豊田市は市外から転入した人が多い。記憶の収集はそういう人たちの記憶も集めるのか。

(事務局)

- ・地域で代々暮らしてきた人だけが歴史とつながっているのではなく、新しくやってきた人もその地域の歴史の一部になっていくと捉えて 記憶収集を続けている。地域の歴史や自然に接近する取っ掛かりにもなる。
- ・少し長い目で続けていきながら、雑談的なやり方など、集まりやすい環境というのを見直しながらかやっていきたいと思っている。

(委員)

- ・会社の歴史保存を担当している経験から、史実に関わる記憶の収集ということになると、ある程度の正確性の責任も伴う。例えば原爆の模擬爆弾がトヨタの工場も含めて3発落とされている。こういったことは、本当の歴史に関わってくる話なので、記憶収集がかえって不正確なものを残すことになりかねない。
- ・博物館と名のつく活動として残すのであれば、正確性を問うべきだと思う。記憶をよりきちんと記録に残すために類似した体験の方2、3人以上での話にするなど、1人だけの記憶だけに頼らないような手法をとると、検証がある程度できるようになる。
- ・戦中以前のことを記憶している方が亡くなっていたり、これから激減していく。この方々の記憶を残すのは、ラストチャンス。計画的にある程度スピーディーにやったほうがいいと思う。

(事務局)

- ・民俗(族)学における聞き取り調査は、雑談的環境に近い状況で行われる。社会学のライフストーリー(ライフヒストリー)研究も同様である。それらは、話者が、どういう人生を過ごし、どう感じてきたかが如実に現れるため、正確性が問われる点もある。そういった意味で言うと、常設展で掲示されている「記憶カード」は、真実性の裏付けをしていない。しかしそれは、それぞれの人の生き方や認識の集合であり、歴史の中で生きているそれぞれの人の声を展示している。

(委員)

- ・山之手自治区の区史を作ったのは、10年くらい前。地域で資料を集めていると、10年遅かったと言われ、代替わりで家を建て直すなどする機会に写真などの資料がなくなっていた。

(事務局)

- ・記憶の投稿でフォーカスされる対象は、高度経済成長期の頃、豊田市の転入人口が一番多い頃以降と考える。それぞれの人生、生き方に関わるような記憶の収集というのは、まだ語ることができる方がいて、博物館にもよくいらっしゃる方も多い。この世代から少し若い世代にかけた人々の記憶収集を頑張っていきたい。

(委員)

- ・子どもたちが家で博物館に行きたいと言ってもらえると、親を連れてきてくれるので支持層が広がっていくと思う。特に和食展は、子どもたちには身近なものなので、アピールもしやすかったと思う。
- ・豊田市博物館を「とよはく」と愛称として親しまれるよう呼んでいけないか。子どもたちも市民の方にも親しんでいただいて、「今日、とよはくに行こう」と使ってもらえたら良

い。博学連携委員会の担当教員にも伝えたい。

(委員)

- ・ある講習会で豊田市民のお年寄りの方と隣の席になって話したところ、その方の周りのお年寄りたちは博物館に来たことがないらしい。博物館とつながりのない人たちの中にも、貴重な記憶を持っている方がたくさんいると思う。そういう人たち何とかとつながりを持って記憶を引き出すには、どうしたらいいのか。
- ・一般論として博物館の来館者は高齢の方が多い傾向があるが、実績報告によると豊田市博物館は若い人が多いという特徴がある。

(事務局)

- ・70 歳以上の方は展覧会も常設展も無料で観覧できる。多い年齢層なので、積極的に利用してもらえるように広報に努めたり、企画を工夫したり、高齢者に響く取り組みを意識する必要があると思う。
- ・一方、勤労世代の市役所の職員でも、5 月の織田信長像の特別公開で初めて博物館に来たという人もざらにいる。高齢者に限ったことではない。古代エジプト展で初めて来たという人も多い。軸がぶれないようにしながら、幅広いことに取り組むのが、様々な方に来館いただくきっかけを作っていく上では大事だと思う。

(委員)

- ・小坂自治区の全世帯に、博物館の古代エジプト展と美術館のモネ展の内覧会の招待をいただいた。3,200 世帯、1 万人いるが、開館 30 年で初めて美術館に来たという方が多かった。市民が来館しやすい呼びかけも、また考えてみてほしい。

(委員)

- ・ニュートンという科学雑誌で、東海湖のことが掲載されていた。東海湖というのは、花崗岩が崩壊して、粘土ができて陶器ができ、地域の資源となった。このことを、ぜひ皆さんに知ってほしい。

(委員)

- ・自己点検評価の「0」になっている部分については、今後の対応が必要だと思う。
- ・記憶の収集など、地域との連携が非常に重要であることは共通認識だと思う。
- ・46 ページ「利用者・市民・地域との関係」で「B13 地域と連携するための方針・計画を作成しているか」ということについて、当館は「していない」。この部分を期待しているので、検討してほしい。
- ・51 ページ「資料コレクション」で、「G02 法令・条約・倫理規定などを遵守して資料収集するための館としてのガイドラインを作成しているか」というところは、これから非常に重要になってくる。差別的発言とか、ハラスメントとか、日常的に起こりやすい状況があることを危惧する。これは禁止する事項を列挙するのではなく、市民や利用者が、博物館をより自由に安全に楽しめる、そういう環境づくりとしてのガイドラインを検討してもらいたい。

以上で、本日の議事をすべて終了する。